

夫貞慶與父同到奥州後歸信州催普代家人攻深志城取而居之改謂松本城貞慶出奔信州三十有三年而又歸本國文祿四し未年五月十日於下總古河卒享年五十法名以清宗得號大隆寺其子兵部大輔秀政奉仕

東照宮賜下總古河城後賜信州飯田城又移松本城子孫相續而繁榮焉小笠原代々傳弓馬之藝甲天下以為武人之泰斗不亦奇乎

貞原氏曰小笠原家初稱の始ハ後醍醐天皇の沙附甲州源氏小笠原信法也貞宗と云ふあり

弓馬の古矣と云ふなり或時 禁中での的の云ひり
ま何武の事氏義貞と始を系してある所村若
あり士族と云はれむ的武村の事の中も中も貞
宗の村礼をよ振て的の中も事をも群と云ふ
ましうの帝ありんは維も貞宗よ昇るを
件されり馬の古矣と勅問あり秀細も勅
書やと云れは孫ありんは維も子及信貞子
代師範と云ふは信法の子も獲職とゆ
ゆされ利権も位下叙せりゆと云ふなり
しおわくハ天下の師範と云ふはゆれ勅

あり貞宗家の内月と詔し入封せしむ貞宗
の玄孫と長厚卿長考といふ人なり將軍義
康公と位仕せり義康公今川左衛門守氏に傳
つ平氏武藏守長考小笠原長厚卿長考被爲
三人と位て武家の統法に考定ししむるは三
人ありし秘傳也此古統を參考して一書と撰
てと我名はけて之後一統の由家ら法集
といふ書に遺流の清中して一七日と書きた
下は廣くこれより小笠原傳礼の家として
代々將軍家と位て天下の仰と爲る善く人

又用しは是小笠原和礼の始也 小笠原傳書

傳書曰後醍醐天皇自此時貞宗冬内一騎討
と多いらんは後なる天皇自是といふ甚しく此
勲上よりけりせらるる勲ありしは極とて
海乃に給ふとて後報ありて貞宗の傳と
かしめりは今京師東山寺清光よりあり衣冠傳
といふは是也

小笠原宮内大輔氏隆

小笠原宮内大輔源氏隆者 或伊豫守 從小笠原大膳大

夫頼氏 或武勇入道頼氏 繼箕裘藝後以軍律授上泉武藏

守藤原信綱信綱者上州人也其子常陸介秀胤相
 續其藝而傳授於大戶民部少輔滋野直光有長野
 出羽守在原業親者繼直光之傳稱氏隆流或曰上
 泉流又岩室卜叶恭廣者從氏隆習騎法得其宗中
 村隼人入道盛世在岩室之門為精妙其子隼人盛
 名繼其藝有根本治左衛門正次者從盛名練習有
 軍終得其宗稱小笠原流有一場平左衛門藤原正
 長者從長野業親得其宗
寬文七丁未年正月
 十一日於江戶死
 小笠原若狹守長政

父遠江守入道心宗正鉄者天文弘治之人而弓馬
 達人也其子出雲守賴定入道休庵從右近大夫貞
 應得長時之傳書其子若狹守長政繼其藝藝文有
 折野弥次右衛門賴廣者從出雲守賴定折野傳書
 作知清
 習軍律後賴廣以軍律授加藤主計頭清正長田三
 大夫重則者得清正之傳書木村八大夫勝家遊重
 則之門得其宗中尾藤兵衛政重者繼勝家之傳
 出雲守賴定入道休庵傳書曰丙午三月系藝
 小笠原大格太史長村同志之太史貞孝又并御子兄
 小笠原以刑部丞同道

我後とて一方一使の拍教寄して後河内が
 出た甚私とて又委内又ケ國よわすりの強馬
 りらひと久我後が教ケ度刑部也よびるを
 系りひの由志よりに由前らよひる由出系
 乃こ由被存く又よ大攝夫又志よりに教部
 の系刑部也延よの拙子よ由出ひて系り人
 之由ひる法よこよはうせ由出の系よ系中よこ
 法わりてよ系下系人由言よ余て由公由志
 ひ由度委と據ら由出也由よ夫乃わこつる由
 存ひ修よ系と由一夫下れ免く由出ひる由

取らるる家として由前らの系よ西國と施
 一の習字ひとてをくをさるわとていふひ
 明くは系沙也とてと子孫んけのためよ
 如新書記也

一宮隨巴齋宗是

宮隨巴齋源宗是者小笠原之族也始仕將軍義
 暉之後赴駿河屬今川氏真達弓馬軍律後為武田
 勝信被害隨巴授弓法於武藤松月齋延子有青木
 五元衛門高賴者從武藤得其宗

武藤松月齋延子
 者仕武田勝賴天

正十五年十月於遠州秋
 葉山連署起請文之列也

甲陽軍鑑曰公方光源院後山秘苑の池に
まづりして又苑内には中國のまづりて
色づかひたるまよを食ふやう形つてあり今
れはるよ舎人の三條河原をあらわすまよの
わづり集あまのまよとて彼聖薬一服
てはる平愈の薬公方よりし薬方を手書付わき
よとのまよよまよ附かへて隨巴とてこれ村子
光源院後山秘苑の池にわづり付て隨巴
付てわづりまよ後光源院後山秘苑の池に
隨河へわづり氏志公薬教書とわづりまよとて隨

巴のまよとてまよのまよとて隨人よら下る氏志公此赤
薬とてわづりまよとてわづり

小懐京憲私書曰永祿二年小懐方下総縣水
城主小懐後家とて原と上総強佐被致今川家
かか勢多し申せし一宮隨波とてあらはる隨波
上総府の池と巻とて懸乃日取とて内へとて
あらはる此室城とて強佐方八子余死とる強佐
大よ警役軍なり
又曰武者とて武田信虎甥佐とて隨波也一宮
隨波とて随子なり

逸見美作守俊直

逸見美作守源俊直者信州人也習弓馬軍律於小澤江鷗軒淳從于時天文年中也江鷗軒者應永年中從小笠原播磨入道宗長傳受弓馬藝俊直子壹岐守信直繼父之藝其子小左衛門直治繼其藝藝能知弓馬古實且直治者從小笠原若狹守長政習彼傳書又就小池甚之丞貞成詳學長時貞慶之傳書始居信州後遊諸州寬文二壬寅年四月十六日享年七十有三於丹州日置死有鶴見善右衛門蕃宥者從直治得其宗

小池甚之丞貞成

小池甚之丞貞成者仕小笠原長時貞慶有功勞故貞慶以家傳書授貞成後貞成仕右近大夫忠政從貞成習諸禮者甚多至今諸州其末流多推曰小池流子孫相續而居豐小倉

畑五郎左衛門與實

畑五郎左衛門與實者與州會津人也小笠原長時貞慶避京師赴會津居與實之宅與實能書藝之長時以家傳古實授與與實者西田角左衛門三辰者就與實傳受之遊正辰之門者多守多勳兵衛正次

得其宗正次後仕酒井宮內大輔忠勝世人推曰烟

流有河內茂元衛門慶方其弟從正
次得宗元祿年中於武江死

星野味庵

星野味庵者與烟奧實同會津人也始號掃部笠
原長時到會津天正十一癸未年於星野之宅卒始
味庵扣長時負慶請習傳書長時詳授與之至今稱
味庵流未流在諸州

小笠原丹齋直經

小笠原丹齋源直經者其先出赤澤山城守清經而
小笠原一族也直經能知弓馬諸禮奉仕

大猷大君

嚴有大君其名徧於華夷延寶六戊午年十一月廿
日卒

柳原忠右衛門忠鄉

柳原忠右衛門源忠鄉者其先勢州人柳原經定子
主計利經來參州其子主計元經後改忠政奉仕

清康君 廣忠君勵軍功其子彦內正告改八兵衛

奉仕

東照宮永祿六年本願寺門徒蜂起戰于小豆坂之
時得首級其子八兵衛正成繼位而奉仕

東照宮正成三男七右衛門政勝者忠鄉之父而習
刀術於水尾庄右衛門為精妙延寶六戊午年三月
廿九日卒忠鄉繼箕裘藝奉仕

嚴有大君

常憲大君又從小笠原直經得其宗能知弓馬禮法
遊其門者多寶永元甲申年十月十二日卒法名即
一日誠

水嶋傳左衛門元也

水嶋傳左衛門元也者習諸禮於齋藤三郎左衛門
久也久也者小池貞成門人也後又從上原八左衛

門其宗後號下也居江都大嶋從遊之人多
田對馬守正英之命奉獻 德松君御白髮顯其名
於日域

德松君御髮重記曰 家總公乃御髮置乃

以白髮ハ 在極門院より集りてせり云上の事

賦有る矣此族より作し他よりあはれよび及ぶ蓋

原乃古より推して是より他よりあんとて論田

正英お推し一更よりあつた也元成と云者あり

久し、東武より一より改して七中有あ

徳和公乃有る矣と述べてそ名源通なきは

正英是よ今はとらん元成極老よ依て中
子相本小石馬の改題と同たりて於正英宅上座
相之

或人曰小笠原流者良流傳物流と号して其
乃古流と傳ふ者多しといふも浮屠の妄説を
号依して傳ふ者多し我々の古流より其
一は正史実録と不見る者之想入よ其家業の
いと傳ふ文と多し又我々の正史実録と入る
也浮屠乃其云と多し其史小説と云ふ事
ハ文よらるる也

卷二終

武藝小傳卷之三

射術

夫弓者始於神代四弓以來精射若干歷歷千
演史鎌倉柳營舉用精射有步射騎射之興行
而世世不廢於其中興日置彈正正次得精
妙大興起之至今學射者無不倚日置之射法
故以正次為射術始祖

日置彈正正次

日置彈正正次者大和人也好弓術得其妙吾國弓
術中興始祖也自往古雖多以弓術顯名者而不詳

其強弱審固持滿正次獨得其微妙可謂傑出於古
今也正次遊諸國後赴紀州高野山而剃髮號留離
光坊威德五十九歲歿

西尾重長傳書曰日置彈正入道道以云
田中大八藏人系曰日置葛藤と云弓乃上手
と於京初稱負とありて日置稱て名人
此名とゆり

関六秀傳曰内野合我より日置及の矢先より
たまり物なり矢より稱てありて有去居陰
よりかくし居て敵破れはら風出て強打し

て要と云教と考と定めて述及と也

吉田重信系譜曰日置彈正居于伊賀國達射術
天下無出其右者其門徒雖有數人吉田出雲守
獨得其妙云

吉田上野介重賢

吉田上野介源重賢者江州人佐々木家族也始號
太郎左衛門好弓術得神妙後從日置彈正正次得
其宗後改道寶此吉田家弓術之祖也

東川香山傳書曰明應三年二月十九日置彈
正修り終りて吉田家より有る吉田上野傳と作